

進路指導が変われば、少子化は解決する

東京都立晴海総合高等学校 相談部教諭・キャリアカウンセラー

千葉吉裕

6月3日、厚生労働省大臣官房統計情報部から、1人の女性が一生に産む子供の数とされる「合計特殊出生率」の統計調査が発表された。今年も、過去最低だった平成17年の1・26から3年連続で微増した1・37であった。

しかし、人口を維持する水準にはまだまだ及ばず、依然、少子化を示す数値のままである。少子高齢化社会の到来は、望ましいことではないとされ、政府は少子化対策担当大臣まで任命して解決を図っている。政府の少子化対策は、働くことと子育ての両立がたいへんなので、子育て支援を中核に位置づけ、仕事と子育てを両立できる環境を整備して、安心して子供を産めるようにするという方針のようだ。

少子化を解決するための方策として、私はこの方針に疑問を持つ。もちろん、環境整備はどんどん推進するべきだが、少子化の解決策としてはあまり期待できないと考えている。現に、女性の年齢階級別の労働力率をみれば、相も変わらず、30〜39歳が底になるM字になっており、結婚、出産、子育ての期間、働きにくい社会になっていることを物語っている。そして、経年と比較すると、M字の底が高くなっているのは、晩婚化や未婚化によるものであって、子供を産んで働く女性が増えたからではない。ワークライフバランスが取れるような環境が整備されれば少子化は解決するのだろうか。私は、それ

よりも高校の進路指導の転換を急ぐべきだと考える。

仮に、私が、少子化対策担当大臣に任命されたならば（ありえないことなので強気に書いてしまえば）、高校の進路指導担当者にも物を申す。

「キャリア教育、キャリア教育というが、皆さん、女性のキャリアについて、しっかり指導しているのか？卒業したあと、進学させたり、就職させたりすればいいと思っている人が多いのでは？」高校卒業して約10年で、多くの女子生徒は、就職、結婚、出産というライフイベントに遭遇し、そこで、自分のキャリアについて真剣に考えなければならず、そして、約7割の女性が、出産とともに職を辞し、子供が育ってから再就職することになるという現実。この状況がよいとは思われないが、この現状を知った上で、将来設計をしなければ、女の子のキャリアをデザインすることなどできない。ちゃんと見通した指導をしているのか」と詰め寄りますね。大臣になった瞬間には、文部科学大臣を出し抜いて、キャリア教育のフォーラムなどで、進路指導担当者を厳しく追及する。

「女性は男性には絶対できない出産というライフイベントに遭遇できるが、これは、何歳でも実現できるものではない。母親になるというキャリアは、とても素晴らしいこと。そこで、出産し再就職する時、何が有効なのか、子育て

と仕事を両立するのに、どのような資格や免許、スキルが有効なのか、しっかり考えて進路指導しているのか！あなたたちが、何も考えないで指導するから、少子化という事態を招いているという自覚を持ちなさい」なんて、架空の話だから語気を荒げたが、小淵大臣にもこのくらい威勢よくやってほしいという期待をしてみよう。

雇用機会均等法から約四半世紀、女性の差別はなくなったと信じたいが、現状は、まだまだ課題があることを卒業生から伝え聞く。それに対し、高校現場では、進路指導を男女の分け隔てなく、平等に同じように指導する。女性も男性と同じように働く時代、そのために、四年制大学へ進学し、指導する学校は少なくない。しかし、大学に進学し、いざ就職しようとする、採用状況に男女の差は歴然。正社員の採用はなかなか厳しい。そのような実態の中で、なんとか就いた職は簡単にはやめたくない。出産をすれば7割の女性が職を辞している現実の中では、結婚、出産が遅くなるのは当然だろう。女性の子育て、再就職を想定したワークライフバランスをとれるような母親としてのキャリアを考えた高校の進路指導の転換、これこそが少子化を解決に導くと私は考えますが、皆さんはいかが考えますか。